タウン タウン 小麦

特定非営利活動法人
発　行　くまがや小麦の会
発行責任者　日向美津江
ホームページアドレス
http://www.kumagayakomuginokai.jp/
くまがや小麦の会　検索

認定 NPO 法人
くまがや小麦の会
since 2006
事務局　〒360-0801　埼玉県熊谷市中奈良 1797-1
TEL. 048-521-7801

Interview シリーズ No. 29

ひと彩々

熊谷市 副市長 大島 英司 オオシマ エイジ

1971年11月20日、東京都生まれ。麻布高校、東京大学工学部卒業。北海道大学大学院工学研究科修了。同年建設省（現在の国土交通省）入省。国土交通省住宅局、近畿地方整備局、東北地方整備局、都市局都市政策課企画専門官などを経て、2022年4月1日に熊谷市副市長に就任。大学時代は狂言研究会に属し、野村万之介に師事したという「芸道」の経歴を持つ。著書に『都市に座標を』『はじめてのエコまちづくり』などがある。

2022（令和4）年4月、熊谷市の副市長に就任し、専門的な知見から街づくりや都市整備、デジタル化などの諸施策を主導する大島英司氏にお話を伺った。

熊谷市とともに

就任前、暑い夏の街、秩父鉄道の乗換駅という印象を持っていたという大島氏は、「実際に生活してみると駅周辺の利便性が高い。平野が広がる地形で、かつての舟運や街道など交通の要衝という歴史も引き継いでいる」と語る。休日は、市内循環バスで熊谷各地を訪れながら、土地柄や風景など街の表情と触れることで街を知ることに励んでいる。

専門性を街づくりに生かす

大島氏は建築や街づくりが専門分野で、国土交通省での広範な業務を前に、「現場」を常に意識し取り組むことを信条としている。東北や熊本では震災復興の第一線で多くのプロジェクトを主導した。大島氏は自身について「外見が頑丈そうだから、地方現場への出向が適当と思われたのかも知れない」と笑みをこぼしつつ、現場で培われた百戦錬磨の技術と知識で、スマートシティやデジタル化などの地方自治体における諸課題と向き合う姿があった。

そして、小林哲也市長の命を受けて、熊谷市副市長に就任。市長マニフェストに含まれる高速道路の整備や、利根川新橋など政策課題の進捗に向けて、大島氏の手腕に期待が寄せられている。

将来に向けて

大島氏は、「行政と民間との良好なコミュニケーションが街づくりにおける大きな鍵となる」と提言している。これは行政運営上の課題の一つであり、将来的な可能性にも繋がる重要なポイントと指摘する。

「地域資源が多様にあり人材も豊富。そのようなポテンシャルがとても大きい熊谷。役所内外との交流促進をはじめ、街づくりの有効な手段としてのデジタルの活用など新たな取り組みを進め、人々が幸せで、多様性を認める社会と街を目指したい」と熱く語る。

大島氏は熊谷地場産の小麦で作られたうどんとフライを味わい、その美味さに感動したという。市民の誰もが住む街の未来を信じ、小麦の味を堪能しながら、喜びに満ちた街のかたちを語り合う。一つの種をどのように実らせるか。大島氏は希望に満ちた熊谷市の将来を想像している。

（ 聞き手：熊谷市立江南文化財センター 山下祐樹　本会会長 日向美津江 ）

麦笛

「熊谷に五十年暮らして」

日向美津江

◆埼玉県と群馬県の境を流れる利根川を越えて熊谷に住み五十年が経過した。生家での暮らしは訳の分からぬ幼児期、生家を離れての学生時代、就職生活を考えると、熊谷での五十年＋アルファーが一生の殆どを占める。出身校が、緒の縁で熊谷に移り住んだ。利根川対岸の熊谷市の事は、ほとんど情報としては知らなかった。安政五年に旧中山道沿いに創業という砂糖卸商を生業にしていた。実家の母の提案で両親と同居の生活が始まった。家族はみな理屈の通った方々だった。実家も繊維の商家だったので、生活に馴染め結婚後半年目には会社に出勤していた。

◆義父は会社経営の考え方を夕食時等に話して下さり、仕入先、得意先、連れ回してくれた。二人の男の子に恵まれ、家事、育児、会社と大忙し、熊谷市の市民団体に参加する時間がなかった。ダイエーが熊谷に出店するにあたり、酒類販売の免許が当時は図示免許であった為熊谷市の酒販店擁護の為、ダイエー一階にリカーショップを出店した。

◆実家の兄がロスアンゼルスに赴任して10年が経っていた頃、子供二人を連れてロスを訪問した。大きな道路の交差点にモールと呼ばれる大型商業施設が建設されていた。このロケーションが当時会社の本社が置かれていた、17号バイパスと国道407号線の交差点によく似ていた。本社敷地の角が空いていたので、本社はそのままで、レッドロブスタージャパンを誘致してショッピングモール建設のテストを行った。客は入った。卸売業の立地はさほど関係しない。407号線沿いに移転先を求め、旧本社跡地に主人の学友が西友の常務だったので西友を誘地。レッドロブスタージャパンがイオン系列だったので、ロスで店舗を見て興味を持っていた、スポーツオーソリティーが名古屋に1号店を出店したニュースを聞き、誘致を打診した。関東1号店として出店。トイザらスからは以前より出店要請を受けていた。平成9年ビッグベア・ショッピングモールが開業した。この辺りから平成13年熊谷商工会議所女性会入会、平成18年市民団体くまがや小麦の会（現在：認定NPO法人くまがや小麦の会）設立と熊谷市の活動に参加していった。

◆熊谷市は新幹線も止まり東京まで40分の地の利に恵まれている。災害も少なく、隣町の東松山には国の文書保管アーカイブスが設置される程の地盤を持っている。残念だったのは人口20万人になった時、中核市にならなかった事だ。外からの事柄、人を受け入れる寛容さを発揮して欲しい。国土交通省より熊谷副市長に大島英司氏が就任された。本誌巻頭の取材に同席させて頂き、副市長の大きな人間力に接し、心が解放された思いであった。市政、県政、国政と一直線になり熊谷市が輝いて欲しい。

小麦の会　活動報告

11/19(土) 第18回熊谷市産業祭 熊谷スポーツ文化公園

規模縮小ではありましたが、3年ぶりの現地開催で好天にも恵まれて、朝から多くの来場者で賑わいました。どのお店も行列ができ、当会もパンはお昼前に完売、シュトーレンも沢山お買い上げいただきました。久しぶりにお客さまと出店者さんたちにお会いできて楽しい1日でした。お立ち寄りくださった皆さまありがとうございました。(R)

12/23(日) 雀幸園 クリスマス会

コロナ禍の為、施設内だけの実施となった。
前新木弘子園長が切望していた園舎の建て替えが完成に近づいている。今年は69名の利用者さんとクリスマス会を楽しむ予定だった。小麦の会からは利用者さんにチョコレートのプレゼントをお届けして、皆様の幸せをお祈りした。

1/13(金) 社会法人つゆくさ (わーくほーむ結、わーくほーむ江南)

コロナ禍の為、施設内だけの実施となった。
つゆくささんは妻沼のわーくほーむ結と江南のワークホーム江南の2カ所に知的障害者のデイケアを運営されてい。今年は男子2名が成人を迎える。昨年に引き続き施設内だけの成人式となった。小麦の会はパウンドケーキの出張講習会を行い利用者さん施設の先生方と一緒に成人式を祝っている。今年はバックパックのプレゼントをお届けした。

文化の薫り 熊谷偉人伝

斎藤別当実盛公（さいとうべっとうさねもりこう）と熊谷次郎直実公（くまがいじろうなおざねこう）・蓮生坊（れんせいぼう）

斎藤別当実盛公像（上）と、熊谷次郎直実像

熊谷の歴史の原点には、平安時代末期の源平合戦で活躍した二人の武将が存在している。妻沼地域を治め、妻沼聖天山を開基した斎藤別当実盛公（1111～1183）と、平敦盛を討つなど源氏の勝利に貢献した後、法然の門徒として仏の道を歩んだ熊谷次郎直実公・蓮生坊（1141～1207）、その生涯は史実と伝説とが入り組みながら、地域文化の華を咲かせ続けている。両者は歌舞伎や能などの文学作品で登場するほか、熊谷駅前の『熊谷次郎直実像』（作・北村西望）と、妻沼聖天山の『斎藤別当実盛公像』（作・田淵吉信）は、郷土の歴史に現代彫刻の技を吹き込んだ名作として現代の人々を魅了している。
（熊谷市立江南文化財センター　山下祐樹）

熊谷の道端から ～ゆるゆる散歩雑記帳～

梯子乗りと街中のシンボル

1月6日、2年続けて中止されていた熊谷市出初め式が行われ、高城神社を皮切りに市内13か所で梯子乗りが披露された。ブランクを感じさせない妙技の数々に心からの拍手を送りつつ、街中では数歩下がって面白いコラボ風景が見られる地点を探してみる。熊谷駅北口ロータリーでは直実公と伝統芸能の融合。駅西通りのお洒落な街路灯や、星川通り「鳥金」のてっぺんに立つ鶏なども、梯子乗りと不思議にマッチする。伝統の超人技と現代風景、日常と非日常の交錯を楽しむのも、梯子乗り見物の醍醐味である。(N・T)

■ 会員募集
賛助会員年会費 10,000円　一般会員年会費 一口1,000円
お申込み：TEL 048-521-7801　FAX 048-521-7900

次号のお届けは 2023年6月 の予定です。
編集室　TEL 048-521-7801　FAX 048-521-7900

あの町この店

権田酒造株式会社

住所：〒360-0843 熊谷市三ヶ尻 1491
電話：048-532-3611　fax：048-532-7889

熊谷で唯一の造り酒屋

かつて熊谷には6軒の造り酒屋がありました。江戸末期、その内のひとつ山星金星で修業を始めたのが近江日野からやって来た権田酒造の創業者です。のれん分けをして権田酒造を創業したのは1850年頃です。山星金星の酒は清正という銘柄でした。その清の一字をもらい「清太喜」と命名し、酒造業を始めたという事です。近江日野商人は大都市のみならず、関東一円の地方都市や在所にも店を出し、醸造業を営む者も多かったそうです。また、心学を学ぶものも多く、社会奉仕を大切にしていたといわれています。今では熊谷で唯一となった権田酒造ですが、経営者家族の人となりは、しっかりとその日野商人の思いを継いで、いつも周りの人を大切に思い、熊谷中の人に愛される造り酒屋です。

ところで、熊谷で造り酒屋として唯一残った理由はどんなところにあったのでしょう。比較的規模が大きくなかった事、酒以外の酒・ビールなどを売るいわゆる問屋業をしていなかった事、そして、後継者がいた事が主な理由だろうとの事。特に6代目の今の社長権田清志さんが継いですぐ、40年ほど前に純米酒や吟醸酒を造り、積極的に販売するなど、新しい試みをしたことも功を奏したそうです。直実という銘柄の酒を売り出したのも歴史があります。昔、埼玉酒造組合で共通銘柄の酒を造ろうと名前を公募したところ、熊谷地区から『直実』が沢山上がってきました。残念ながら直実は選ばれなかったのですが、せっかくだから権田酒造で直実銘柄の酒を造ることになり、1960年に商標として登録。今では様々な味を楽しめる看板銘柄になりました。

そして、昨年新しい銘柄の酒が生まれました。今、権田酒造で酒造りをする中心人物は7代目を継ぐ予定の長男権田直仁さん。そして七代目予備と自己紹介する次男の権田拓弥さんとで力を合わせて酒造りをしています。息子さんたちが造った酒を原酒のまま瓶に詰め、熊谷次郎直実の幼名である『弓矢丸』という銘柄で出したところ、大評判でした。味わい深くきれいで、初々しさを感じる酒です。権田直仁さんは「手作りの良さを活かした酒造りがしたい。機械に頼るのではなく、すべての工程に人の手を加えていく、酒と深く関わりあうことにロマンを感じています。」と、語ってくれました。「酒蔵は地域の拠点のつだと思っています。酒造りの場として大切に守っていくと同時に、地域の人と関わる場としての役割も大切にしたい」ともおっしゃいました。これからどんな酒を造っていきたいかとお聞きしたところ「重みがあるけどきれいな酒、武士のような酒を造りたい。」と抱負を述べてくださいました。お酒は熊谷市内の酒店やスーパー、デパート等で買えます。ネットショップの利用者も増えています。また、各地で開催されるイベントなどでの出張販売には酒造りをした本人たちが行って販売をしています。酒蔵にも直営店があり、そこでは弓矢丸などの限定商品や季節商品もお求め頂けます。お酒について興味深いお話も聞けます。熊谷の誇る権田酒造の酒を皆さんも是非味わってください。（O）

酒造りをする権田直仁さんと拓弥さん

弓矢丸